

断片／植物〈京都市伏見区深草藤森町 1〉

—画廊のなかの植物図鑑—

小林 良子¹⁾

Fragment / Plant 〈1 Fukakusa-Fujinomori-cho, Fushimi-ku, Kyoto〉

— Botany in Gallery —

Nagako KOBAYASHI

抄 録：2006 年 10 月 3 日から 15 日まで京都市左京区岡崎円勝寺町にある画廊ギャラリー 16 で筆者は、断片／植物〈京都市伏見区深草藤森町 1〉というタイトルの個展を開催した。

2005 年 12 月からおよそ 10 ヶ月かけて行った植物の断片の採集から個展の発表までの経緯を報告する。

キーワード：断片，植物，住所，現代美術，図鑑

I. はじめに

2006 年 10 月 3 日から 2 週間、京都市左京区岡崎にあるギャラリー 16 という画廊で断片／植物〈京都市伏見区深草藤森町 1〉というタイトルの個展を開催した。白い画廊空間のなかに黄緑色のガラス製のテーブルが 4 台、椅子 4 脚、テーブルの上には本が 12 冊おかれている。(写真 1) (写真 2)

本のタイトルは、断片／植物〈京都市伏見区深草藤森町 1〉、断片／植物〈京都市伏見区深草越後屋敷町 112〉、断片／植物〈京都市伏見区深草大亀谷大山町〉、断片／植物〈京都府相楽郡精華町乾谷奥畑口 128〉、断片／植物〈枚方市渚元町 8-6〉、断片／植物〈京都市伏見区深草北蓮池町 915-2〉である。表紙は住所ごとに違って全部で 6 色である。閲覧形式の展示方法をとる。

住所のなかにある植物の断片を採集し、書籍紙にカラーコピーし、製本する。京都市伏見区深草藤森町 1 は京都教育大学の住所であり、その敷地にある植物の図鑑をつくる。ジャン・ジャック・ルソーのように。

ジュネーブに生まれたフランスの思想家ルソーは、『告白』のなかで「ひとりで徒歩で旅したときほど、ゆたかに考え、ゆたかに存在し、ゆたかに生き、あえていうならば、ゆたかに私自身であったことはない。徒歩は私の思想を活気づけ、生き生きさせる何ものかを持っている。

1) 京都教育大学

じっと止まっていると、私はほとんどものが考えられない。私の精神を動かすためには、私の肉体は動いていなければならないのだ。田園の眺め、快い景色の連続、大気……」とあるように、ルソーは、晩年『社会契約論』や『エミール』の出版による筆禍を受け、逃亡生活を送ったサン＝ピエール島で植物採集をおこなっていたようだ。

筆者自身は、今まで事物や、記号を制作のモチーフにしていたが、自然物に目を向けるのは 30 年ぶりである。実際はじめてみると広い大学の敷地を歩きながら新しい植物を発見することは楽しいことであった。

植物の多い季節からはじめると混乱のため、途中で挫折してしまう恐れがあったので、1 年の中で一番植物が少ない「冬」の季節からはじめた。

Ⅱ. 制作方法

1. 植物の採集

植物の採集に必要な道具は、はさみ、革手袋（トゲのある植物をとるときに使用する）、バケツ（夏季は水のはいつているもの）、植物の種類を調べる図鑑、マスク、などである。

冬は濃い深緑色の葉が多い。1 年間風雨にうたれた葉は硬く、傷ついている。植物の種類も少ない。この季節は、採った植物を数時間放置していてもしおれない。

春になると、落葉がはじまり、新しい葉といれかわる。若葉の出る頃、虫が孵化するように植物がくしゃくしゃの葉をひろげていくのを見た。（図版 1）（図版 2）

同じ種類の植物でも場所によってまったく別のものではないかと思えるほど大きさが違っている。理科の共通実習棟の南側に茂っているつたの葉はとても大きい。日当たりが良く、水分も豊富なためであろう。音楽科の建物の西側のつたは小ぶりで密集している。

植物は場所と密接な関係を持っている。

日本画のモチーフとして椿の木が用いられることが多いが、採集をはじめて、新たに椿の葉は整っていて、美しいことを実感した。

植物は、雑草のなかにもうっとりするほど美しい形をしたものがある。（図版 3）

かつて、世界を形の類縁関係でとらえていた、あるいは、印し（*signatura*）がものの表面に付けられていたことを信じる可能性が残されていた時代があったようだ。

胡桃が頭の病気にさくことや、トリカブトが眼病を癒すことなど植物の葉の形や胡桃の実のしわと脳のしわの類似性などをみてもわかるように、ミッシェル・フーコーの『言葉と物』のなかんでてくる文章「大地の臓腑より生じたあらゆる草、樹木、その他が、それぞれ書物であり魔法のしるし（＝記号）であるというのは真実ではなからうか？」が示唆するように植物はそれ自体、自然物であると同時に記号性もかねそなえている。

2. 定着あるいは記録

採集した植物を定着させるには、どのような方法があるだろうか。(1) スケッチをする。(2) 写真で記録する。(3) 押し花にする。(4) 実物カラーコピーをする。(5) 映像で記録する。などが考えられるが、筆者は (4) の実物カラーコピーをする方法を選択した。用紙を選択、吟

味すれば、クリアーに細部まで鮮明にすばやく記録できるし、また、厚みのない植物を選べばその植物のわずかな明暗も見逃さない。物質のディテールをシャープに写し取ってくれる。(1)のスケッチは時間がかかりすぎ、1年で京都教育大学内にある植物をおよそ網羅することは不可能である。(2)の写真で記録するは、現場で写せば、それ以外のものも写ってしまう。図鑑のように白いレイアウトが出来ない。などの理由で採択しなかった。

ルソーは、押し花にする方法をとっていたようだ。

カラーコピーをするとき用意するものは、植物、A4判の書籍紙、ハケ、雑巾、A3以上の大きさの白いケント紙、などである。カラーコピー機は富士ゼロックス複写機 Docu Centre Color a450 を使用した。

採集した植物がしおれないうちに実物カラーコピーを終える。A4判の紙の中におさまるものを選ぶ。コピー機のガラステーブルが汚れたら、ハケや雑巾で丁寧に拭き取る。植物と複写機のカバーのあいだに大きめの白いケント紙をのせ、余白が黒くならないように注意する。

その日採集した植物のコピーが終わったら以前にコピーしたものと重複していないかも1度照合する。ただし、「つくし」と「すぎな」のように同じ植物でもその成長過程で著しくすがたが変わってゆくものは、採用する。

コピーした原稿が80枚ないし40枚になれば、製本する。「製本工房」という商品名の丸善書店からでている製本キットを使用した。白、茶、苔色、紺色は市販のものがあつたがあとの2色は白の表紙を塗装した。

Ⅲ. 画廊のなかの植物図鑑

1冊1冊の本には、社会性を付加するためにISBNを取得し付けている。本の分類は、出版社である筆者が自由に分類記号をつけることができる。まず頭にCをつけ、それに続く4桁の数字を分類コード一覧表のなかから選ぶ。第1桁は出版社が想定した対象読者である。第2桁が発行形態、第3、第4桁が内容コードである。筆者は、C0645 とつけた。一般、図鑑、自然科学、生物学である。

筆者は作品を制作するとき、はじめから美術の制度としての枠のなかで作品をつくるのではなく、美術を出発点としてどこまで遠くまでいけるかということを中心に制作のコンセプトにしている。

提示された本が美術作品であるのかそうではないのかは、作者が作品をどこでどのように見せるのか、作品が見る者の「眼」にどううつるかによって決まるのだ。額縁のある絵画や台座のある彫刻は、どこに置いても絵画であり、彫刻であるが、現代美術といわれている諸現象は、そうではない。筆者が、メーテル・リンク作の『青い鳥』を読むとき、チルチルとミチルの兄弟が青い鳥を探して旅をするが、前日青かった鳥が翌日かごのなかで黒い鳥に変質しているくんだりなど、額縁のない絵画が、あるいは台座のない彫刻が一旦画廊から現実の空間にうつれば美術作品ではなくただの物質に変容することと重ねて解釈してしまう。

今回は、美術としての虚構を現実にあるいは科学に最も近いところで成立させたかった。(図

版 4～8)

実際ホワイトキューブの白い画廊空間で見る植物図鑑は、黄緑色のガラスの光をうけて、画廊のなかで本のページをめくってゆく者が光を見ているような幻惑を覚えたといっていた。またそこでは、採集する者の速度ではなく、1度に本のページを見ていると見ている自分が逆に植物に見られているように感じることもあった。採集する時の植物と自分との1対1の関係ではもはやない。作品としての成立は、発表する場所と密接に関わりを持った事件でもある。

IV. 図鑑の絵

筆者は、「図鑑の絵」というものに興味をもっている。画面の背景はレイアウトされ、余白である。やや、中央に植物の図や、鳥類の図が描かれている。図の部分は、線のみで描かれたものもあり、事物の立体感がほどこされているものもある。西洋の遠近法で描かれた絵でもなく、伝統的な日本画のように奥行きのない絵画空間でもない、その中間にあるような絵画が成立している。レイアウトされた余白に理性を感じる。余白には、決して人間に所有されない距離がある。中平卓馬著作の映像論集『なぜ植物図鑑か』にすぐれた文章があるのですし長くなるが、引用する。「図鑑は直接的に当の対象を明快に指示することをその最大の機能とする。あらゆる陰影、またそこに忍び込む情緒を斥けてなりたつのが図鑑である。“悲しそうな”顔の猫の図鑑というものは存在しない。もし図鑑に少しでもあいまいな部分があるとすれば、それは図鑑の機能を果たしてはいない。あらゆるものの羅列、並列がまた図鑑の性格である。図鑑はけっしてあるものを特権化し、それを中心に組み立てられる全体ではない。つまりそこにある部分は全体に浸透された部分ではなく、部分をつねに部分にとどまり、その向こう側にはなにもない。」

V. 最後に

いままで述べてきたのは、藤森学舎の植物採集に関してのみにしぼったが、勤務地が藤森学舎であるので十分に時間をとることができた。環境教育センターのある越後屋敷町は採集しに行くのが土曜日や、日曜日であったので墨染め通りの入り口からセンターの門にいたるまでの長い道に自生する植物に限られてしまった。附属養護学校の植物採集は、養護学校の非常勤職員であり、本学の総合科学課程生涯発達コース造形表現専攻の卒業生、深町和代さんをお願いした。附属京都小学校は、本学美術科の卒業生で京都小学校の教員である石倉一頼さんが、関心を示して下さったが、真夏の暑い季節で植物が枯れかかっている時期であったため、またの機会に譲ることにした。やはり採集にはゆったりとした時間が必要である。今回は、画廊のスペース、採集する時間、テーブルの大きさ、などから6つの異なった住所の植物の図鑑を12冊提示するのにとどまったが、工事中で入れなかった附属高校などまた新たな場所の発見にもなって、この制作を続けてみたい気がする。

Ⅵ. 引用文献

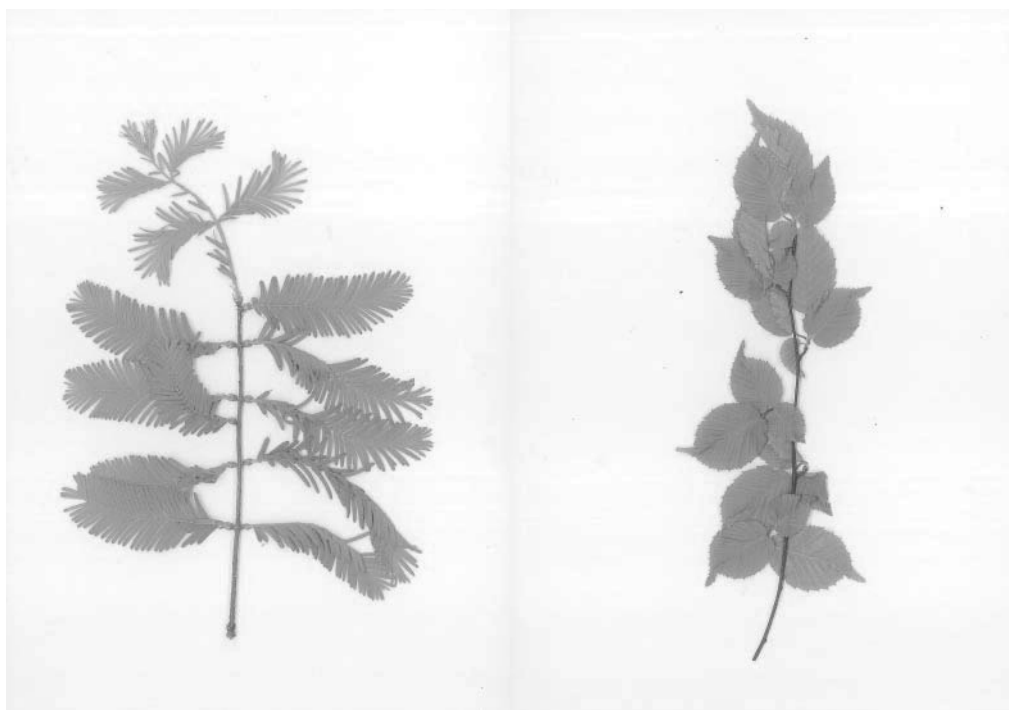
- 1, 桑原武夫, 1956年, 一日一言, 岩波書店, 東京
- 2, ミッシェル・フォーコー, 1974年, 言葉と物—人文科学の考古学, 新潮社, 東京
- 3, 中平卓馬, 1973年, なぜ, 植物図鑑か, 晶文社, 東京
- 4, 羅和辞典



写真 1 ギャラリー 16 (閲覧形式の展示)



写真 2 ギャラリー 16 (作品拡大部分)



図版 1

図版 2



図版 3

図版 4



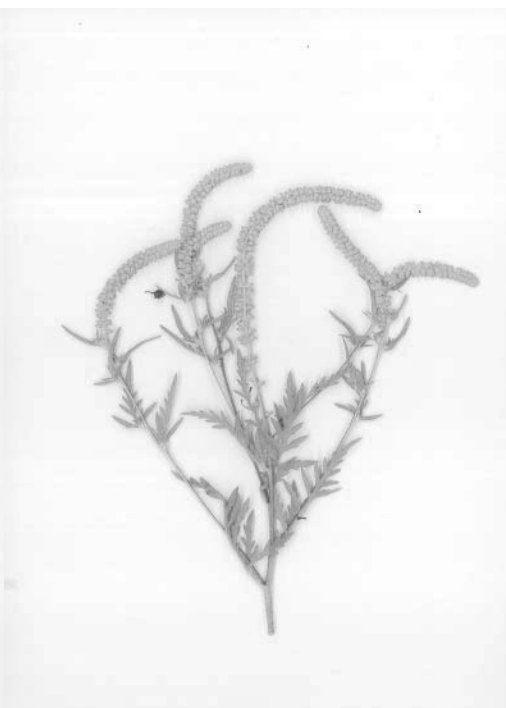
図版 5



図版 6



図版 7



図版 8